

【没ネタ】私はお前らに
モテたいわけじゃない
い！

ぱちぱち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

没ネタ短編。ブラックジャック作成中に完成した為投稿。

目次

私はお前らにモテたいわけじゃない！

1

私はお前らにモテたいわけじゃない！

『貴様に転生する権利をくれてやろう』

「え、嫌です」

『うむ。ではよい来世を！』

「だから違うっあ、ああ〜！」

等という下らないやり取りをした後、私は神様と名乗る輩の手によるものか赤ん坊になつて人生を再び歩み始めることになった。

今世の名は黒木智子。生まれ変わった時はふぎけんじゃねえ、責任者出せ！と赤ちゃん言葉で暴れ狂つた物だが、性別がそのままでもかつ日本に生まれ変わるといふのはかなり運が良いのでは無いだろうか？と思ひ直し今では穏やかな赤ちゃんライフを送つてゐる。

「智子ちゃんは大人しくてとっても良い子ね。しかもこんなに可愛い」

「あら、カオル君もとっても良い子じゃない」

ママンの腕の中で照れ隠しにペシペシと腕を叩くも伝わらない。褒められるの、何十年ぶりかなあ。前世だと親孝行する前に亡くしてしまつたから、今世では一杯孝行する

と決めている。

でもそれはそれとしてこの歳（0歳）で親に手放しで褒められるのは恥ずかしいんだよ！こちとら前世は30超えてたんだぞ！未婚だったけど！恋愛した事なかったけど！

あ、やべ。灰色の前世を思い出したら涙が出てきた。今世はすぐ泣いちゃうからなあ。0歳だし。

「あら、もうお眠かしら」

「智子ちゃん、本当に泣かないわねえ。オムツかもしれないわよ」

「あぶー（オムツじゃないです）」

あ、ママン待って！ちよ、そこはデリケートゾーンでああー！

6年後

どうやら今世の私は勝ち組らしい。

いきなり頭が湧いた事を言ってる自覚はある。正直すまない。だが、本当の事なのだ。

まず一つ目。うちの両親はそこそこの資産を持った資産家である事。前世は共働きで母さんが病気で倒れてからは兄さんも私も学校を辞めて働いていたから、それと比べ

たら雲泥の差だ。

前世の家族は愛しているが、体を壊すまで働き詰めになるのはもう嫌だからな。いきなり視界がブラックアウトするのはもう経験したくない。

次に二つ目。幼馴染のカオルきゆんだ。赤ん坊の頃からの付き合いだ。カオルきゆんすげー可愛いんだ。お父さんは見たことないけどお母さんは凄いい美人さんだしきつと将来はイケメンになる（確信）

しかも運動神経も抜群で、公園デビューしてからは瞬く間に近隣のガキ大将に収まってしまうた。

青田買いが捗るでえ（○）

そして三つ目。多分私はチート転生者という奴だ。

まず身体能力。先程カオルきゆんが近隣のガキ大将だと言ったが若干訂正がある。私とカオルきゆんの二人がこの近隣の幼児序列一位と二位を占めているのだ。そして私達は常に一緒。男を支える女として一歩引いて彼を盛り立てているから彼がトップだが、私とカオルきゆんが喧嘩をするとまず私が勝つ。しかも圧倒的な差で。

全力で走ると犬を追い抜いたし、ちよつと頑張れば車を持ち上げられると言えはお分り頂けるだろうか。

頭脳の面も非常に優れており、前世の記憶は大体思い出そうと思えば思い出せるし、

計算問題等もちらつと見ただけで解答がすぐ頭に浮かび上がる。難問と呼ばれ懸賞金が出てくるような問題でもだ。父親の伝を使って解答を学会に発表しているのだが、もし賞金が入ってきたらコンピュータ関係に投資するとしよう。何せ時期的に今は平成に入つてすぐ。街を見ても全然コンピュータの姿を見かけないし、何よりネットがやりたい。早く窓が来ないだろうか。パソコン通信も乙なものだと思っただけだ。

そしてこれが身体面での最大の恩恵だが・・・可愛いんだ!この智子ちゃんの容姿が!もうめがっさ可愛いんだ!

父さん母さんがどっちも美形だからこうなるんじゃないかなーとは思つてただけどさ。

正に立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花つて奴ね。

にこつと笑うだけで周囲の悪ガキどもが一斉に顔を赤く染めてしまふし、道を歩く時に変なおじさんに声をかけられる率も125%ある(必ず声をかけられる。残る25%は再度突撃してくるの意)

護身術に合気道や空手を習っているので(最近跡取りにならないかと言われて断つた)実戦訓練がてらおじさんたちをボコボコにして警察に突き出すのが日課のようになつてしまった。すでに地元の名物少女みみたいな扱いになつて居る。

このように私は間違ひなく勝ち組に分類されていると思うんだよ、うん。

前世ではモテるモテない云々の前にまず生きる事が大変だったからね。今生ではモツテもてのばら色人生が待ってるぜ！

いやっほう！

更に6年後。

「お嬢様、学校に到着いたしました」

「………そうか、ご苦労」

執事の言葉に目を開ける。もう着いたのか。カバンを手に取り、執事に言つてくると声をかけた。

幅の広いリムジンから降りると、校門前に立つ特攻服を着た金髪の男が声を荒げた。

「全えん員、整いいれえええええつ！」

「「押忍!!おはようございませす! 姐さん」」

「うむ、おはよう」

校門周辺から様々な学校の制服や学ランを着た人相の悪い男達が校門から校舎の入り口まで列を成して並び彼女が通り過ぎる時に頭を下げる。

この周辺一体の女帝はその中をゆつくり歩きながら校舎に向かっていた。

いつものようにそのまま校舎へと向かうのか……と思われたその時、彼女はピタリ、

と足を止める。

頭を下げている一同に動揺が走る中、彼女はゆったりとした動作で左に立つ男を見る。

「見ない顔だな。どこの人間だ？」

「え．．．あ．．．その．．．．．」

「いや、言わなくて良い。その右手で握っているものを捨てれば見逃してやろう」

にこやかな表情でそう言った彼女に、男は滝のように汗を流しながらごくりと唾を飲み込んだ。

見抜かれている。全て。

周囲が殺気立つ中彼女は尚も笑みを崩さない。

慈母のような微笑。だが、彼にとつては巨大な蛇が鼠を前に笑みを浮かべているようにしか思えなかった。

追い詰められた鼠が取るべき道は二つ。一か八か噛み付いて隙を突くか．．．．．全て諦めて腹を見せるか。

そして男は、前者を選んだ。

「死いねやあああくろきいいいい！」

「馬鹿が」

右手のナイフを男は真つ直ぐ智子に突き立てた。

化け物のような女でも人間。ナイフを腹に受ければひとたまりも無い。

そんな思いを込めたナイフの一刺しは、しかし。彼女の左手の親指と人差し指に阻まれる事になった。

渾身の一突きを、指二本で。

笑顔のまま智子はそつと右手をデコピンの形にして、男の額を『出来る限り』優しく弾いた。

ツガン、という音と共に奇妙な悲鳴を上げながら数回転宙を舞い、男はグラウンドに倒れ付す。

「背後を吐かせろ」

「はいー」

「……………気づかなくても仕方が無い。気にするなよ」

「……………は、はいい！」

傍に居た男に声をかける。向かい合つた男がどこぞの刺客だと気づかなかつた事を責められると思つていた彼は、その言葉に目を見開いた後、涙を零して頭を下げた。

その様子をうむ、と頷いて、智子は校舎への道を再び歩き始める。

ひそひそとカツケエ、やら流石は姐さん、やらと声が辺りに響くが、智子は特に気に

する様子も無く校舎の中に姿を消した。

その背中が、男達を惹きつける。

校舎の中に姿を消した智子は下駄履きで靴を履き替え、同じように校舎の中でも自身に挨拶をしてくる面々に笑顔で応対して教室に入る。

「よお。見てたぜ、智子」

「あら。恥ずかしいわカオル君」

「へっ」

にこりと笑うと穏やかな笑みを浮かべて彼は智子の隣の席で、特注の椅子を軋ませた。

うん、可笑しいよね。ここは普通の私立の中学校で君も私も学生のはずだよね。何で君の椅子は社長さんが座るような総革張りの椅子なのかな。

体も・・・うん。あの将来イケメン間違いなしの爽やかボーイが小学校高学年になると急にガチムチのボディビルダーも真っ青な体になるとは見抜けなかった。この私の目をもつてしても。

いや、まあこういうすつごい体も好みっちゃ好みなんだけどね。前世のお父さんを思い出すし。

ただ、体が成長したせいで下の方まで成長しちやったのはいただけない。今も私の肩を抱き寄せてくるし。

あ、キスまでは許すけどそれ以降は私を倒さないと駄目だからね？

「……………駄目か」

「駄目。最初に言い出したのはカオル君でしょう？」

女に負けるのを恥ずかしいと。必ず私を超えと言つて彼は己の信念を曲げて様々な分野の格闘技を始めた。

その成果も上がってきているのだが、まだまだ私には及ばない。

彼の持ち前の怪力と同じ出力を私の細腕は出すのだから。そして格闘技の年季でも私が上。なら、まだ超えられるわけには行かない。

まあ、この調子で頑張るのなら高校生くらいになったら考えてあげてもいいかもしれないが。

まあ、こっちは良いのだ。

「お、見ろよ智子。お前の舎弟共が校門から挨拶してるぜ」

「うん、そだねー」

そう。こっちは良いのだ。多少、いや大分思惑と違つたが。

問題はあれである。

「智子姐ええさんへ！愛をおおおお込めてえええ！愛羅武勇ううう！三つ唱おおお
!!!」

『『愛羅武勇！愛羅武勇！愛羅武勇！』』

「声がちいさいせえええええ！」

『『愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あああ武う勇
うううううう！』』

金髪、モヒカン、坊主。学ランから特攻服、中には何故かジャージまで。

あいつら全部智子が小学生の間にボコボコにした変態共である。

いや、最初は近隣のチンピラが声をかけてきていたんだ。そいつらをボコにしてたら
どうも「やたら腕っ節のあるガキがいる」と近隣の不良共の噂になったらしい。

で、最初はカオル君（流石にきゅんといえる外見ではない為）に言っていたのだが途
中で連中、馬鹿の癖に真実に気づきやがって……

そして、気づけばこうなっていた。

県内全てを勢力に収めた女帝、黒木智子。それが今の私の肩書きだ。

確かに私は、モテたかった。

前世の鬱憤を晴らすように派手に生きたかったさ。

でも。

「姐さああああああん！」

『『『愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あ武勇うううう！愛い羅あ武勇うううう！』』』
うううううう！』』』

私はお前ら（不良共）にモテたいわけじゃない!!!